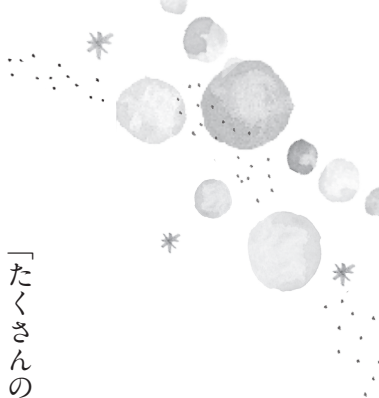




忘れ物

「たくさんさんの忘れ物が、豊かな森をつくるのです」

昔、ある人が教えてくれました。まだヨーロッパからの移住者が来る前からカナダに暮らしていた人々の知恵です。その人たちは、これから訪れる冬が厳しくなるかどうかを、リスの行動から予想していたそうです。寒くなる前に、リスは保存食として木の実を土の中や木のウロなどに貯めこみます。その木の実の量が多いと、厳しい冬がやってくるのだそうです。

小さな体で森の中を縦横無尽に駆け回り、生命をつなぐ食べ物をかき集めるリスたち。しかし、その木の実を全部食べるわけではないのです。なんと、せっかく集めた食べ物のほとんどは忘れてしまうのだそうです。やがて厳しい冬が終わり、美しい春がやってきます。木のウロに隠された実は、鳥たちが見つけてついばんだり、

運ばれたりしていきます。土に埋められた実からは芽が出てきます。そうして木が育ちます。その木が数えきれないほど多くのいのちを養います。そして再びリスがその木の実を集め、どこかに隠しては忘れ、春になれば再びその芽が……。

世間では、「忘れる」というのはどちらかといえば望ましくないことです。あなたにとって「忘れる」ことはどのようなイメージですか？ 私は子どものころ、忘れ物がとても多いのが困りごとでした。どんなに注意していても、忘れ物をしてしまうのです。「忘れ物をしないようにしましょう」と、小学校の先生からよく叱られました。でも、「しないようにできる」のなら、最初からそうしています。好きで忘れていくわけではないのです。今なら、自分の持つて生まれた特質であったと推測もできます。大人になって、いろんな工夫をして、ようやくなんとか困らないようになりました。それでも「忘れる」ことは、人の目に好ましくないと映りがちなもの。それらを自分の中に持っていることは、本当に苦しいことです。それゆえに嫌われたり軽んじられたりする経験があればいいそう。

でも、忘れるということが森の成長に大切な役割を果たしている、それを知って、

私はなんだか心が軽くなりました。そうです、忘れることは良いことだってたくさんもたらししてくれるのです。私も思い出しました。子どものときに忘れ物が多いのは困ったことだったけど、嫌なこともすぐに忘れてしまえる特技も、自分にはあったのでした。

「老いることは、神さまからお預かりしたものを、ひとつひとつお返ししていくこと」。そうおっしゃったのは、認知症のお連れ合いと長い時を歩んできた方でした。パートナーはとくに自分の名前を忘れ、関係性も忘れていました。しかし彼の言葉は、大切なことに気づかせてくれました。忘却とは、むしろ返却でもあるのだと。私たちが忘れても、神さまは決して忘れません。たとえ私たちが自分自身のことすら忘れてしまったとしても。たとえ私たちが大切なことや世界の痛みを忘れてしまったとしても。教会の礼拝でお祈りするとき、私はいつもこんなことを言葉にします。「神さま、私たちが忘れている隣人、忘れている祈りがあるなら、それを再び思い起こさせてください」。祈る相手である神さまに「あなたに言い忘れていることがあったら思い出させてください」とは無遠慮な物言いかもしれません。で

も、神さまにお祈りすることは、私たちが忘れていた大切なことを再び思い出すことでもあると、私は考えています。忘れやすい身であるからこそ、神さまに助けてもらって思い出すのです。

ところで、教会には多くの方が集まりますから、忘れ物も少なからずあります。牧師である友人は、持ち主のわからない「ぼけ封じ」のお守りが教会のベンチに置かれていたよと苦笑い。ぼけは封じられたのでしょうか。別の友人は、礼拝堂で赤い分度器を拾ったそうです。算数の宿題に励む小学生などいないのになぜだろうねと不思議がっていました。私も同じような経験があります。ある教会でのこと。日曜日に礼拝が終わったあと、毎週のように杖を忘れていく人がいたのです。持ち主はわかっています。その人、朝に礼拝堂の前であいさつすると「ヒザが痛い」「歩くのが難儀だ」と苦しそうな顔をしているのです。なのに礼拝のあとはみんなと楽しくおしゃべりし、そして杖をつかずに帰っていったのです。忘れられた杖は、その人が痛みを少しでも忘れられたしるし。来週もまたその人が来てくれることを願ひ、私は杖を見えやすい場所に立てかけるのでした。